備蓄支援ボランティア〈釜石大槌地区行政事務組合消防本部（大槌消防署）〉　13～15班

13～15班の21名は、釜石大槌地区行政事務組合消防本部（以下「大槌消防署」という。）に伺いました。ここでは、土のう作りを行いました。台風や洪水で浸水を防ぐ最後のとりでとも言える、とても重要な備蓄です。

大槌消防署では、岩崎貴彦氏、臼沢泰氏、佐々木諒多氏の３名の消防署員の方から土のう作りを教わります。この日使用する土のう袋は、震災当時からずっと支援を続けてくれている大阪府からのものだそうです。

作り方の説明の後、参加者も２人一組となって重さ10kgの土のうを実際に作っていきました。張り切ってスコップをふるう参加者たちですが、土は袋いっぱいまで入れてはいけないと指導を受けました。満杯になった袋は積む時に平らにならず、袋と袋の間に大きな隙間ができてしまうのです。

土のうの積み方も実践しました。袋の結び口を横にして積み上げるものと思いがちですが、下に向けるのだそうです。上からグッとつぶして隙間をなくすことができ、中身の流出も防げるそうです。そして平らにならし、左右を少しずらしながら横に広げていきます。

何となくざっくりとしたイメージを抱いていた土のうに、合理的な作り方・積み方が確立されていることを知り、感心しきりの参加者たちでした。

作業後、署長の深野智欣氏から「東日本大震災を経験して」というテーマで講演がありました。震災当時の映像を見ながら、当時の御自身の行動、消防署の活動、震災後の業務などを詳しく伺いました。

釜石湾では震災前に世界最大水深63ｍの湾口防波堤が完成し、震災では津波の高さを抑え、到達時間を６分遅らせることができたそうです。それでも被害は甚大で、大槌消防署は全壊、車両５台が全損、殉職者２名という状況でした。災害時に最も頼りとされる消防署が大きな被害を受けるという異常事態の中で、署員たちは震災直後から救急活動に奔走し、大阪からいち早く駆け付けた消防隊と協同で、山火事の消火にもあたりました。復興に向けても、防災施設の復旧作業はもとより、仮設住宅の避難者のケア、瓦れき置場の防火管理など、山積された業務に忙殺された日々であったと語られました。

防災士を目指す参加者たちにとって、エキスパートとしての消防署員の皆さんの覚悟と行動は、一つ一つが参考になることばかりでした。尊敬の念とともに、自分たちもこうして人の役に立てるよう努力する決意を新たにした、充実した半日となりました。

岩崎 貴彦氏

臼沢 泰氏

佐々木 諒多氏

大槌消防署
署長　深野 智欣氏

津波に関しては「地震があったら津波と思え」「津波と思ったら高台に逃げよ」「津波危険地帯には居住するな」の3点に尽きると思います。皆さんの住む東京でも、いつどんな災害が起こるか分かりません。常に防災意識をもち、人々の命を守る防災士になってください。期待しています。

●参加者の感想

学校の授業で、土のうという言葉は聞いていたが、作り方、積み方、どのような時に使用するかは知らなかった。今回の体験を通じて学べてよかった。	生徒
土のう袋に多くの土を入れて作成してしまい、重くて運ぶことが困難になることを実感した。適切な量、大きさの土のうを作成することが肝心だと学んだ。	生徒
台風の対策に使える土のうの作り方を学べたのは、海抜0m地帯がある江東区民として参考になった。	生徒
自分たちで実際に土のうを積み上げてみた。上手く協力することができ、短時間でたくさんの土のうを積み上げることができた。災害時にもこのようにみんなで協力し、効率良く作業を行うことが必要であると感じた。	生徒
ボランティアは「助けてあげる」というスタンスではなく「少しでも力になれば」ということが大切であることを実感した。	生徒

防災士養成講座[8][9]　クロスロードゲーム　決断のワークショップ　三陸花ホテルはまぎく

講師／一般社団法人おらが大槌夢広場　代表　神谷 未生氏

最初に、クロスロードゲーム※の説明がありました。取り上げる演習問題は、架空の話ではなく大槌町民が直面している状況を踏まえたもので、震災発生後から現在まで、一緒に考えるよう町から高校生へ要請されてきた課題です。正解も不正解もなく、復興の難しさが浮き彫りになります。大切なのは、防災と復興という問題を大槌町民の立場で、町民のリアルな視線で考えることの説明がありました。

第１問は「消防団の消防班長として火災現場に派遣された。現場では、すぐ搬送すれば助かる状態の母親と、搬送しても助かるか分からない状態の子供を発見。助けられるのは一人だけ。あなたはどちらを助けますか？」

第２問は「震災で大勢の町民と職員が亡くなった、大槌町旧役場庁舎。あなたはその建物を震災遺構として残しますか、それとも取り壊しますか？」

参加者はいくつかのグループに分かれて活発に意見を交換し、その結果を発表し合いました。

１問目では「意見が分かれてまとまらなかった。」「医療の原則として、助かる可能性を優先する。」「母親の意思を尊重して、子供を助ける。」などの意見が出されました。

２問目に対しては「原爆ドームと同じ。今はつらくても、後世に語り継ぐため、やはり保存したほうがよい。」「実物を見るということは、本で読んだり、記録を見たりすることとは大違い。」「石碑でよい。木や花を植えてモニュメントにし、家族を亡くした人々の記憶に残ればよい。」「管理コストもかかり、復興の負担となる。」など、多様な意見が発表されました。

参加者は協議を進めていく段階で、災害時には様々な想定外のことが発生すること、そしてそれに即時対応していくことの難しさを実感したようです。この防災キャンプが、防災士としての知識の獲得のみならず、自分自身が災害時・復興時に何をしていくべきかを考える場だということを理解する、有益な時間になりました。

※阪神・淡路大震災で神戸市職員が経験したジレンマの事例を基に、プレイヤーがそれらのジレンマを自分の問題として考えることで災害対応を考える「防災ゲーム」

参加者の感想（宿泊研修２日目）

●復興支援ボランティア　海岸清掃

ごみを回収することはできたが、１回の活動ではやり残した感じがあった。今後自ら個人的にボランティアに参加し、続きを行いたい。	生徒
大小様々な物がたくさん落ちており、復興が完了するまで、まだまだ時間がかかることを改めて感じるとともに、自分はこれから被災地の復興のために何ができるだろうかと考えさせられた。	生徒
砂に埋まった大きな網を皆で協力して取ることができた。ボランティア活動は複数人で行動することが多いので、しっかりとコミュニケーションをとることが大切だと気付いた。	生徒
生徒同士で自然と役割を分担して行動している様子が見受けられ、普段は、教師から生徒に役割を与える場面が多いので、もっと生徒に考えさせることも大切だと感じた。	教員

●防災士養成講座 [7] 災害とボランティア活動

ニーズが無いことにはボランティア活動ができないこと、ボランティア活動の下支えとして支援を受ける側と支援する側のニーズのマッチングが重要であることを知った。	生徒
避難所を運営するとなった時に、どのような問題が発生するのか、どのような意見が出てくるのかなど、実体験を基にしたコツを聞くことができて、ためになった。	生徒

●防災士養成講座 [8][9] クロスロードゲーム

やりたくはないけど、決めなければならないものが一気に積み重なるのが地震だと思った。	生徒
防災についての一人一人の意見があり、防災についての価値観の学習ができた。	生徒
極限の生死を分ける判断とお互いの根底にある同一の思いの両方を理解して事を進めるということを学んだ。また、自分が誰かについていこうとかではなく、防災士として街の人を救う、引っ張っていくということをしっかり意識して勉強していきたい。	生徒
地方では人と人とのつながりが都会よりも強い傾向にあり、消防団の存在がより大切なことを知った。自分は誰かに何か危険を知らせてもらうまで動けていないと思う。自主的に動いていかなければならないと思っているので、根本的なところから見直したい。	生徒
大槌町旧役場庁舎を残すか壊すかという設問を通して、大槌町の現在の状況と、被災者の苦しみ、多様性について学んだ。二択は非常に危険で、選択肢だけを出すのではなく、念頭にある共通の思いを考えることが重要だと分かった。	生徒
命に関わる事柄について、自分が人の命を決めるということは、とてもつらく勇気がいることだと思う。自分は人の命に優先順位を付けることはできないが、もしそのような状況が発生したら、自分がやらなくてはならないかもしれない。責任と覚悟について学んだ。	生徒
人の生命あるいは理屈ではなく感情が絡む問題に生徒は果敢に挑んでいた。時間内にグループの結論に達しない経験も、生徒にとっては有意義なものであったに違いない。	教員